

臨死体験による一人称の死生観の変容

—日本人の臨死体験事例から—

岩崎 美香 明治大学大学院情報コミュニケーション研究科*

Changing views of life and death in first-person's perspective through near-death experience : The case of Japan

IWASAKI Mika

1. 研究の背景と目的

1-1. 変則的体験としての臨死体験

心理学の古典であるジェイムズの『宗教的体験の諸相』[James [1901-1902] 1920=1969-1970]では、常超的、神秘的な体験が取り上げられていることで知られている。しかし、ジェイムズ以降、こうした体験は心理学のメインストリームから無視されたり、軽視されたりする傾向が長く続いた。このような超常的、神秘的要素を帯びるなど、通常の観点から説明しにくい体験は、「変則的体験 (anomalous experience)」と総称されている。変則的 (anomalous) とは、通常でない、例外的であることを意味する。近年、ようやく、変則的体験は人間の体験の全体性を構成する重要な一部であると捉えて、そうした体験を改めて検討していこうという動きが生じている [Candeña et al. 2000]。

一般にも比較的良好に知られている変則的体験として、臨死体験 (near-death experience) が挙げられる。臨死体験は、何らかの危機などに遭遇し通常の意識レベルが低下している状態で

起きる変則的体験であり、体験内容には文化的、個人的背景を越えた共通性が指摘されている。臨死体験現象がどのように発生するのかという仕組みの解明については結論が出ていない¹⁾。しかし、本人にとってその体験は実際に死の先に踏み出したと感じられたり、死の恐怖が薄らぐなど、その体験的な世界に沿う時、興味深い側面が見出される。

1-2. 一人称の死への関心と臨死体験研究

臨死体験研究の中心的な役割を果たしてきたグレイソンは、臨死体験を次のように定義する。「臨死体験 (NDEs) とは、超越的で神秘的な要素を帯びた深い心理学的な出来事であり、典型的には死に近づいた人、もしくは生理学的または情緒的な強い危機の状況にある人に起こる。それらの要素は、個人の自我を越えたという感覚、神もしくは高次元の原理と一体になったという体験、といった言い表しがたい内容を含んでいる」²⁾ [Greyson 2000]。

実際には死に近づいたとまでは考えにくい人も、医学的な記録の上で死に近づいたと確認されている人と同じように臨死体験に特徴的な体験をしていることもわかってきた [Owen et al. 1990] が、病気や事故などで突発的に生命の危機に瀕した人たちから多く報告されてきた体験であるため、死に隣接する体験として関心

*明治大学大学院 / 〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台
1 - 1

E-mail: iwskmk007@ybb.ne.jp

を集めてきた。臨死体験の研究史は、「死に瀕する時に当事者は何を体験するのか」という、一人称の死体験についての関心の歴史であると言えることもできる。

たとえば、1970年代に先駆的な研究を行ったオシスとハラルドソンは、当時盛んになりつつあった死学（タナトロジー）が人間の死の全体像を捉えるに至っていないことに飽き足らず、死に近づいた当事者の臨終時のヴィジョンや臨死体験の研究へと向かった [Osiris & Halaldson 1977=1991]。臨死体験の存在を世に広めたことで知られるキューブラー・ロスは、臨床家の立場から、患者本人が語る臨死体験に耳を傾け、人間の死の瞬間やその後に訪れる意識状態を洞察することに精力を注いだ [Kubler-Ross 1997= [1998]2003]。死に瀕した当事者が語る体験を聞く機会に恵まれたムーディは、その体験に共通性があることに気づいて、『かいまみた死後の世界』 [Moody 1977=1989] にまとめた。

1980年代に入ると、こうした体験がどの程度共通性を持つのかについて統計的な手法でアプローチがなされるようになる。リングやセイボムは、瀕死状態に陥った人の30~40%に発生している体験であることを明らかにした [Ring 1980=1981, Sebom 1982=2005]。

日本では臨死体験は、死にかけた人が親族に会う、三途の川や花畑を見ろといった体験として以前から一般に知られていた。キューブラー・ロスやムーディの著作を通じて臨死体験が紹介されると、こうした体験に改めて光を当てようとする動きが見られた。1980年代半ばに、ムーディの『かいまみた死後の世界』に刺激を受けたとする松谷みよ子は、日本各地に暮らす市井の人たちの「あの世の話」の体験談を数多く集めて編纂している [松谷 [1986]2003]。

1990年代になると、臓器移植法の制定に伴う死の判定基準の論議がなされ、高齢化社会を背

景とした死の受容の問題が浮上する中で、臨死体験に新たな関心が集まった。立花隆がNHKと共同作成したドキュメンタリー番組「臨死体験」では、臨死体験の発生メカニズムとしての脳内現象説と実体験説の検証が焦点となったが、そこには死の先にはどのような世界が待ち受けているのか、それはどの程度客観的に捉えられるものであるのかという問題意識が見て取れる [立花 [1994]2000a, [1994]2000 b]。宗教学者のカール・ベッカーは、臨死体験が日本人を含む東洋人の宗教文化や死生観に大きな影響を与えてきたと指摘し、臨死体験者の経験を私たちのよりよい生き方や死生観を形成する手がかりとして積極的に活用することを推奨している [ベッカー 1992]。医師の山村尚子は高齢者医療の現場では死への幅広い知識が必要であるとして、大学病院の患者を対象に臨死体験の調査を行った。その結果、昏睡状態に陥った患者の4割近くが臨死体験をしていること、患者個人の背景的要因と無関係に臨死体験は起きていることなど、アメリカでの研究結果と一致するような事実が明らかにされた [山村 1998]。

2000年代に入ると、死への関心や問題意識とともに臨死体験の研究が活発に展開した1990年代とは対照的に、日本での臨死体験研究の進展は停滞する³⁾。特に日本人の臨死体験事例の調査に基づく研究は見当たらず、現状では日本での臨死体験の実態は十分調査を尽くされていないとは言えない。また、一人称の死をめぐる関心と臨死体験研究の成果をどう結びつけるかについてもなおざりにされている感がある。

1-3. 研究の目的

本論考では、まず、聞き取り調査に基づいて日本人の臨死体験の実態を把握し、提示する。そして、体験された世界や臨死体験後の変化に焦点を合わせ、臨死体験から、一人称の死についてどのような展望が開けるかを含めて、新た

な視点を提示することを試みていく。

2. 調査と結果の概観

2-1. 調査方法

アメリカ及び日本の先行研究データでは、一定の意識レベルの低下に陥った人の約4割が臨死体験をしているという結果が得られているが、臨死体験者の絶対数は決して多くないと考えられる。そのため、調査は特定母集団を設定せず、国内に在住する日本人の臨死体験者を探し、一人ひとりをインタビューして事例を積み重ねるといった方法をとった。調査場面では、あらかじめ臨死体験にいたる経緯、体験内容、その後の変化などの質問項目を設定してそれをもとに半構造化された面接でのインタビューを行った。

調査開始前に、調査対象者に対して、文書と口頭で、調査の趣旨をはじめ、調査に協力するかどうかは自由意志であり途中であっても拒否できること、インタビューの内容は研究目的にのみ使用すること、対象者個人が特定されないように発表の仕方に注意を払うこと、個人情報管理に努めることなどを十分説明した。その上で、調査対象者から文書と口頭で、調査への協力の同意を得た。

2-2. 調査対象者

2008年から2012年までの期間に、知人の紹介などを介して、男性6名、女性10名の合計16名の臨死体験者⁴⁾に実際にインタビューすることができた。この内1名は、臨死体験を二度しているため、調査対象となったのは16名だが、臨死体験の事例は17例となっている（以下、表1参照）。

調査対象者の臨死体験当時の年齢は、6歳から69歳までに及んでいる。インタビュー時の年齢は15歳から80歳にわたる。臨死体験からの経

過年月は、インタビューを行った時期の数ヵ月前から43年前まで遡るものまでがあり、平均経過年数は21年であった。

臨死体験に至るまでの状況は、高熱、突然の発作、急性の疾病、アレルギー反応、病気の手術、事故、出産など多岐にわたる。

2-3. 対象者の背景

対象者の当時の属性は、主婦、学生、会社員、教員、自営業、アーティストなど多様である。

出身地に関しては首都圏が若干多いが、これはインタビュー調査上の都合で、対象者がほとんど首都圏在住の人に限られてしまったためと考えられる。

信仰については、両親がキリスト教徒、幼い頃に洗礼を受けたなど、キリスト教の影響下にあった対象者が2例、創価学会が2例、祖先崇拜が1例、出身地の民俗宗教が1例、9事例は信仰しているものはないと回答し、2事例が無回答という結果であった。

これまでの結果において、調査対象となった臨死体験者の年齢、性別、出身地、属性、信仰、臨死体験に至る経緯において、特に共通する要素は見られない。

2-4. 体験内容

臨死体験の内容は表1に概略を記した。

さらに、臨死体験がどのように展開したのかの詳細を具体的に掴むために、いくつかの事例について体験者本人の語りを抜粋して提示してみる。

《事例B：男性 当時の年齢28歳》

心臓が止まって、真っ暗で、苦しいっていう状態で倒れている。でもその時はまだ体の中には、いる感覚にはあるんですよ。

その次の瞬間飛び上がっているんです

表1 臨死体験者と体験内容の概要

事例	性別	調査時の年齢	体験時の年齢	体験時の属性	出身地	信仰など	臨死体験に至る状況	体験内容の概要
A	男性	15歳	10歳	小学生	東京都	両親がキリスト教徒	高熱が2週間継続	マントを着た顔のない女性とエレベーターに乗った。エレベーターが開くと、周囲は明るく、赤や黄色の花々が見えた
B	男性	41歳	28歳	メーカー研究員	大阪府	母の影響で創価学会に入っていた(当時)	心臓発作	倒れて真っ暗になり、気がつくとき自分の体を斜め上から見下ろしていた。「死ぬのはいやだ」と思った瞬間、真っ白な光に照らされ、自分の体に戻った
C1	男性	41歳	13歳	中学生	神奈川県	不明	脳髄膜炎	自分が寝ている姿を見た。また、何度も天井の方向へ昇っていくことを繰り返した
C2	男性	41歳	26歳	映像制作者	神奈川県	不明	肺水腫	観音様のような女性が招くかのように現れた。招きを断ると、女性が憤怒相になった
D	男性	28歳	6歳	幼稚園生	東京都	特になし	扁桃腺の手術	薄暗い光で照射されたドームのような部屋の天井から、ベッドに横たわる自分を見ていた
E	女性	62歳	49歳	パート勤務	埼玉県	特定の宗教に所属しないが、先祖に線香を供えるのが日課	交通事故	花が両脇に咲く白い舗装道路をずっと歩いていて、最後にお葬式の花輪のところで行き止まった
F	女性	48歳	26歳	主婦	大分県	特になし	出産	天井が落ち、強い光で周囲が真っ白になった。花畑とそこに流れる小川が見え、満面の笑みを浮かべた3人の人が立っていた。行こうとしていたら、母親の声で我に戻った
G	女性	61歳	20歳	大学生	福岡県	特になし	高熱が継続	周りの人に話かけても反応がなかった。振り返ると、布団に寝ている自分の姿があった
H	女性	69歳	69歳	主婦	栃木県	特になし	脳静脈瘤の手術	川の向こうで父が自分を呼んで手招きし、母は川のずっと下流で自分に背を向けて立っていた
I	男性	45歳	13歳	中学生	静岡県	特になし	池で溺れる	池の底から出る光の中に入ると、太陽が6つある他の惑星に生まれ変わり、そこで一生を生きる体験をした
J	女性	57歳	30歳	小学校教師	東京都	特になし	急性腎不全	遠くに星のような光が輝く、宇宙空間のような奥行きのある暗がりの中に漂っていた
K	女性	73歳	30歳	主婦	大阪府	特になし	卵巣のう腫の手術	水平方向に伸びる円錐型のトンネルに吸い込まれ、奥に行く手前で引き戻された
L	女性	80歳	67歳	自営業	京都府	特になし	急な血圧の上昇	一面輝くような花の咲く場所で、川の向こうから父に呼ばれ、伯父には来るなど言われた
M	女性	64歳	23歳	大学生	東京都(中国・海南島で出生)	幼少時、カソリックで受洗。16歳でカソリックを去る	心臓発作	夜中にお手洗いから出たら、廊下の突き当たりのところが、金色に輝く坂道になっていた。音楽が聴こえ、よい香りが漂う中、坂道を登ってくると、突然真っ暗になった
N	女性	56歳	35歳	会社員	鹿児島県(奄美大島)	奄美大島のユタ神信仰	甲状腺機能亢進症	オレンジ色のポピーのような花が咲いている花畑に行った。行けども行けども誰に会わず、「飽きたな」と思った頃に、下から呼ぶ声があった
O	女性	33歳	15歳	中学生	神奈川県	特になし	自動車事故	最初に人生を逆行する走馬灯体験をした。場面が切り換わり、長いトンネルの中を歩いていると、その先から当時好きだったバンドのメンバーに手招きされた。目を覚ました時に、真っ白な光が人や物へと分けられていくのを見た
P	男性	56歳	46歳	プロミュージシャン	東京都	32歳から創価学会に入信	抗生物質のアレルギー反応	周囲の人、遠方の人も含め、その時何をして何を感じているかがわかった。明るくて暖かい色をした光が見え、そこに行きたくなくなった

※ C1 と C2 は二度にわたって臨死体験をした同一人物

よ。で、斜め上から、自分の顔を見ている。

体が冷たいのは、中にいる自分もそうだけれども、こっちにいる自分も冷たい感覚を持っているんですよ。

で、その時はね、息苦しいという感覚はないんですよ、なんかね。

「これは死ぬ？」。死っていうのを直観したんですよ、その時に。

「死ぬのはいやだな」とまだ思いました、やり残したことがいっぱいあるし。

一番強く思ったのが、まだ見ていないパートナーですよ、お嫁さんですよ。その人に出会いたいと思ったんですよ。

そう強烈に思った瞬間に、スーっとものすごい光がブワーッと見えてきまして。だから真っ暗が真っ白になったんです。

それで、今度、その、倒れている自分にスーッと吸い込まれるようになっていくんです。

で、スーッと「入ったな」と思った瞬間に、なんか今度は止まっている心臓が、バクバクバクって動きだしたんですね。

《事例F：女性 当時の年齢26歳》

（子供を）産んだ後に寝てるでしょう？

産んだ後に天井がドーン、ドーン、ドーンと落ちてくる感じ。

落ちてきて、なんかもう真っ白になって、ものすごく明るい、パーッと光が差したみたいに。

で、まあ、お花畑、小花ね、大きい花でなく、小花がいろんな色のたくさんの花がパーッと咲いていて。

で、ちょっと2～3メートル先に足で跨げるくらいの川。小川、本当にきれいな水が流れている。軽くうねった感じ。

そこに2～3人くらいの人立っている

て、にこにこにこにこ笑っているの、こっち見て、満面の笑みで。

で、手招きしているんじゃない、ただ見守っていてにこにこにこにこして、こっちに行きたくなるような魅力的な感じっていうのかな。「えー、そっちはなんなんだろうな」というような。

で、そっちに行きそうになって、フーっと。

でも、私はベッドに寝ているのね。

「死ぬんだなあ」と思ったかな。こわくは全然なくて、「ああ、私死ぬんだなあ」とボーっとしているの。

で、行こうとしたら、母親が「〇〇子、〇〇子！」って名前を呼んでゆすつたんですね。で、はっとして目が覚めたの。

《事例I：男性 当時の年齢13歳》

溺れて、苦しくて、息ができなくて、「ああ、このまま死ぬのかなあ」と思いました。自分は死ぬんだ、というあきらめた感じになったんです。あきらめた感じになって、手放した瞬間、楽に呼吸ができるようになった気がしたんです。

気がつくと、溺れる自分を客観的に見ている自分がいたんです。自分が溺れているのを少し上の方から見ているんですよ。

そしてものすごい光を見たんですよ。その光は池の底から来ているんですよ。その光にぼくは吸い込まれるようになっていきました。

入っていくと真っ暗だったんですよ。真っ暗になってしまったので、光はないのか、光を探し求めました。遠くに点のような光が見えました。

小さく点のように見えた光に近づいて行って、その中に入った瞬間、別の惑星に生まれ変わったんです。

その惑星では小さな子供でした。成長して大人になり、年老いて死んでいき、一万年くらいその惑星で過ごしたという体験がありました。〈中略〉

その惑星で死んだ後、控え室みたいな部屋に入ったんです。そこで次にどこに転生するか選ばされるんです。

迷わず地球を選んだんです。地球にはやり残したことがあるまま途中で死んでしまったという思いがあったものですから、もう一度地球に生まれ変わりたいかったです。地球を選んで、その控え室みたいな部屋を出たら、自分が池の畔に横たわっているのに気がついたんです。

《事例J：女性 当時の年齢30歳》

真っ暗な、宇宙空間みたいなところがあって、そこには、きらきら、きらきら光って、輝くものがこう散らばっているんですね。

自分も浮遊しちゃってて、いろんな格好をして、ゆったりと、ひっくり返ったり、腹ばいになったりしながら、こう浮かんでいる状態なんですね。

だいたい時間とかっていう感覚がないんですね。どれくらいの長さ、ゆらゆら、自分が無重力のような状態で、その中で泳ぐような、浮遊している状態が、長く続いたのか、短いのかっていうのは、自分でわからないんですけれど。

ちょっと気がついたら、遠くの左前方奥の方に、きらーっと光る星みたいなのが、きらきら、きらきらしていて、そこだけは特別にこう一点輝いていて。で、「あっ、あそこになんかすごーく輝いているものがあるなあ」と思って、「あれは何なのかなー」って。

で、自分がそこに行こうとか、そういう

気持ちがあるわけでもなくて、なんか遠くにもものすごく、きらーっていうものがあった、その状態で、終わりなんですよ。

臨死体験の内容やパターンについては、すでに別の論考〔岩崎 2011〕で検討しているので詳しくは触れないが、ここで上記の事例を踏まえながら簡単に概括しておく。

臨死体験の前半で体験されているのは、移動や移行、そして何らかの存在との出会いである。後半では、帰るように促されたり、障害物が立ちふさがり、自分の意志で戻りたいと思うなど、そこから先に進めなくなり留まれなくなる事態が発生する。このように、どこかに移動や移行して誰かと出会うという前半と、先に進めなくなり留まれなくなるという後半の大きく二つの場面展開が見られる。ただし、事例Jのように特段の場面展開はなく同じ光景が続く中に漂い、いつの間にか終わっていたというケースもある。

2-5. 臨死体験後の変化

調査結果では、臨死体験後には、17事例中15事例に何らかの変化が見られた（表2参照）。臨死体験後の変化として、最も際立っていたのは、死に対する考え方・感じ方の変化である（17事例中11事例）。この点については次の節で詳しく検討することにする。

見えない世界の存在を確信する、信仰している宗教の教義への理解が深まる、人生の支えができる、常識や他者の考えに囚われなくなる、職業上のモチベーションが変化するなどの、人生観や価値観の変化は、17事例中8事例に見られた。

持病が治った、新しい器官が出現したような身体感覚が生じた、気分が高揚し元気になったという身体的・生理的变化は、17事例の中で3事例報告された。

表2 臨死体験後の変化

事例	性別	の調査時 年齢	年体 年齢	死に対する考え 方の変化	人生観・価値観など の変化	身体的変化	超感覚の出現	その他の変化 (闘病体験によるもの など)
A	男性	15歳	10歳	特になし	特になし	特になし	特になし	特になし
B	男性	41歳	28歳	・死後の世界はあると思った ・体から離れた存在が行くところがある	・一般のサイエンスでは解明できない領域が存在すると認識 ・科学を超えた科学で見えない世界を解いていくことを自分の研究テーマとしたいと思った	特になし	インタビューの1年前に、はじめてUFOを見る体験をした(注1)	・激務だった当時の会社を辞めた ・結婚願望を再認識し、2年後に結婚した
C1	男性	41歳	13歳	特になし	見えないけれども存在するかもしれないものに抵抗感がなくなった	特になし	意識を自分の体の外に飛ばすクセが直らなかった	特になし
C2	男性	41歳	26歳	・死は時系列的に生きている我々からは理解できないところがある 「死がこわい」のは仕組みだと思った ・死が怖くなくなった	・これまでの価値観が自明でなくなり、物事を素のままで見つめる視点ができた ・現実に対する認識が変わったので、仕事で制作するもののクオリティが高まった	・肺水腫が一晩でよくなった ・体の12箇所にはラップのようなものが開いた	・霊的存在が見える ・人間、植物、鉱物などのエネルギーの流れが見える、感じられる ・シンクロニシティが頻繁に起こる	・人間は死ぬことで期限が決まっていると実感し、物事にシビアになった ・死を身近に感じるようになった
D	男性	28歳	6歳	特になし	特になし	特になし	特になし	特になし
E	女性	62歳	49歳	亡くなる時にあそこを通るんだなと思った	特になし	特になし	特になし	・交通の安全に気を配る ・療養中、周囲からたくさん助けを受けたので、自分も人を助けたいと思った
F	女性	48歳	26歳	変化なし(死後の世界も輪廻転生もあると思っていたので、特に変化していない)	特になし	特になし	4～5年前から三次元の人間でないような人が見える(注2)	ケミカルな薬のせいであのような体験が起きたと思ひ、次の出産は陣痛促進剤や麻酔を使わない方法で生んだ
G	女性	61歳	20歳	・肉体は上着と感じた ・輪廻転生の考えに理解を示すようになった ・小さい頃から恐れていた死が気がつくとも怖くなくなっていた	・常識にとらわれない価値観で考えるようになった ・体外に離脱するという究極の体験をしたので、ものごとは何とかなるといふ人生の指針みたいなものをもらった	特になし	・親族の死を予知する ・夢を通して死者と交信する ・人間や植物のエネルギーが感じられる ・花の教室の生徒たちのエネルギーと交流するような精神的なレッスンが実現 ・他人の状況がテレビモニターのような画面に映る ・UFO目撃	・臨死体験、出産、手術、父親の介護など、いろんな経験を経て、今を生きるといふことに集中することに到達した

H	女性	69歳	69歳	死ぬ時はあの川を渡るのかもしれないと思う	特になし	特になし	特になし	特になし
I	男性	45歳	13歳	・死んだ後は、時間のない世界に行く ・死は卒業であり、解放であり、幸せだと学んだ ・死が恐ろしくなくなった	・目に見えない世界に興味を持ち、目に見えない世界を生活の中心に据えた ・世の中の価値観に囚われずに客観的に物事を見れるようになった ・別の惑星で麻の加工に携わった記憶がきっかけとなって、バイオマスとしての麻の利用法を普及させる活動に積極的に取り組んだ	アトピー性皮膚炎が治った	・自分が相手に聞こうと思っていたことに対する相手の答えが前もってにわかるようになった ・少し上空の視点から周囲の状況を把握できる	特になし
J	女性	57歳	30歳	死ぬ瞬間は怖くないのだと思った	特になし	特になし	親類がいつ亡くなるということが敏感にわかるようになった	・人生がいつまでも続くようなイメージで考えなくなり、物事の優先順位が明確化した ・所有欲が薄くなった
K	女性	73歳	30歳	変化なし。小さい頃から死が怖かったが、臨死体験の後も変わらず死がこわい	特になし	特になし	特になし	健康に特に気をつけるようになった
L	女性	80歳	67歳	(死後に行くかもしれない) 三途の川はこういう美しいところなのだと思った	特になし	特になし	特になし	特になし
M	女性	64歳	23歳	・あの体験以来、死を恐れなくなった ・「あんな素晴らしい世界なら行ったほうが利口のようね」と言ったりする	前から人の言うことを気にしなかったが、ますます気にしなくなった	特になし	・高熱で寝ている時、亡くなった祖父が自分の枕元を守ってくれるようにいた ・分かれ道で、「どっちがいいでしょう?」と問いかけると、どちらに行けばいいかわかるようになった	特になし
N	女性	56歳	35歳	特になし (小さい頃、家の地下室に人の形をした発光体があるのを見てそれが自分だと思っていたので、もともと自分の体は借り物だという感覚があった)	特になし	特になし	・退院直後、夜中にドアのガラス越しに青い光が入ってきて、何か言いたげな不思議な存在たちと遭遇した ・ヒーリング能力があると周囲から認知されている ・他人の身体の病巣が見える ・神様が質問や相談に答えてくれる (注3)	・仕事を辞めて人生の流れが変わった ・何かやることがあるから生き残ったと思うので、以後それを探そうになった ・郷里奄美のユタ神から病気は神事しなさいという知らせだと言われ抵抗を感じたが、少しずつ自然の流れに任せて神事をやっていたと思うようになった

臨死体験による一人称の死生観の変容（岩崎）

O	女性	33歳	15歳	<ul style="list-style-type: none"> ・皆きれいな光のところへ還れると思う ・死がこわくなくなった ・役割が終わった時に死が訪れると思うので安心している 	世界が光でできているということが何かの時に立ち戻るところとなり、人生の支えを得た	特になし	<ul style="list-style-type: none"> ・ヒプノセラピーをきっかけに人生が流れるようなシンクロニシティが続くようになった ・目に入った看板や、たまたま開いた本の頁から、自分に意味のあるメッセージを読み取るようになった ・初対面の人の置かれている状況や気になっていることがわかるようになった（注4） 	死にかけたのに生きている自分の役目が何なのか模索するようになった
P	男性	56歳	48歳	<ul style="list-style-type: none"> ・死は、「ああ、こういう感じなのか」と思った ・死に対する恐怖が薄らいだ 	信仰している宗教の教義への理解が深くなり、その教えの正しさを確信した	臨死体験後、1～2カ月は、テンションが上がって、元気だった	特になし	特になし

※表中の（注1）、（注2）の超感覚の出現については、臨死体験から10年以上を経てからのものなので、臨死体験との関係は明らかではない。また（注4）については、臨死体験以外のものが超感覚の出現のきっかけとして本人に語られており、超感覚と臨死体験との関連はこれも明らかではない。（注3）は、臨死体験以前からたびたび超常的体験があったが、臨死体験以後、そうした傾向がより強くなった。

臨死体験後に超常的感覚⁵⁾が出現した事例も少なくない。未来予知的な感覚が生じる、霊的存在やエネルギーが見える・感じられる、初対面の相手の状況が分かる、体外離脱が自在化する、シンクロニシティ現象が頻発する、UFOの目撃など、超常的な体験を持つようになった事例が17事例中9事例見られた⁶⁾。欧米の先行研究においても、臨死体験後に、人生観や価値観の変化、超常的感覚の出現など、さまざまな変化が報告されている [Ring 1980=1981、1984、Sabom 1982=2005、Noyes 1982=1991、Flynn 1982=1991、Atwater 1994=[1995]1997、Sutherland 1992=1999]。日本人を対象とした今回の調査においても、臨死体験後にいくつもの興味深い変化が起きていることが明らかになった。

3. 臨死体験者の一人称の死生観の変容

3-1. 臨死体験による死への考え方・感じ方の変化

臨死体験後の変化として際だっていたのは、死に対する感じ方・考え方の変化である。先行研究でも、死に対する考え方の変化が最も大きな割合で出現していることが指摘されている [Ring ibid、Sabom ibid、Noyes ibid、Flynn ibid]。本論考の調査においても、同様の結果が得られている。

調査の結果を見ると、臨死体験者の死生観の変化について大きく分けて2種類のタイプが見いだされる。この2種は必ずしも別々の人間に見出されるわけではなく、同一人物に混在するケースもある。

まずひとつは、死に直面することによって、人生の目的や物事の選択に自覚的になったり

(事例B、C2、J)、この瞬間を生きること集中するようになった(事例C2、G、J)、死なずに生きている自分の役割があると感じてそれを探さようになった(事例N、O)、健康や安全に留意するようになった(事例E、F、K)というものである。こうした変化は生命の危機や闘病体験によってもたらされた変化であると捉えられる。

もうひとつは、「死後の世界はあると思った」、「亡くなる時はあそこを通るんだなと思った」など、死の先にある世界をイメージ化するというものである(事例B、C2、E、G、H、I、L、M、O、P)。死の先にある世界をイメージ化することに付随して、死への恐怖がなくなったり、薄らいだりしたということが語られたりする場合もある(事例C2、G、I、J、M、O、P)。このような変化は、臨死体験自体によってもたらされたものであると考えられる。死後の世界のイメージ化が生じるという変化が見られた事例は、17例中11例と6割以上を占める⁷⁾。本論考では、臨死体験によって生じた、死の先の世界のイメージ化に焦点を当てていくことにする。

3-2. 死の先にある世界のイメージ化と死の恐怖の減少

調査結果では、死の先にある世界をイメージ化している11事例中、死の恐怖が減じたと言っている事例は7事例にのぼる。このようなイメージ化と死の恐怖が減じるの間には密接な関係があると考えられるが、そこにはどのようなつながりがあるのであろうか。

まず臨死体験者は死の先にある世界をどのようにイメージ化しているのか、その語りから具体的に見ていくことにする。

たとえば、臨死体験者は、出会った光景を次のように語る。

事例E：当時49歳、女性（どこまでも続く

道を歩いた）

本当に亡くなる時は、あそこを通るんだーと思った。〈中略〉みんなでこういうところで亡くなっていくのかな、なんて思ったりしていましたね。

事例H：当時69歳、女性（流れの急な川を目の前にした）

死ぬ時はあの川を渡るのかもしれない。

事例E、Hの臨死体験者は、その光景を死の先に踏み出した世界と解釈し、死が到来する時に辿る経路をその体験から予測する語り方をしている。

さらに、自分の目にした光景について、次のような感概を述べる臨死体験者もいる。

事例L：当時67歳、女性（美しい花の咲き乱れる光景の中で赤い橋のかかった川を前にして）

私は三途の川ってあんなきれいなところまで行ったんだと思って。〈中略〉ああ、三途の川ってこういうところなんだと思って。ああ、そうかなって思って、後で気がついて。

事例M：当時23歳、女性（音楽が聴こえ、芳香が漂う中、花の咲く光輝く坂道を登って）

あの体験以来死を恐れなくなった。死を恐れている人には、「あんなに素晴らしい世界なら行ったほうが利口のようなね」と言ったりする。

事例O：当時15歳、女性（真っ白な光が人や物に分化していくのを見て）

光の体験をしたことによって、死がこわくなくなった。みな、きれいな光のところへ還るんだと思うので。自分のこの世での役割が終わった時、死が訪れると思っている。だから安心している。

事例L、M、Oはそれぞれ、「きれいなところ」「素晴らしい世界」「きれいな光」について述べ、死の先にあるのはそうした世界であることをイメージ化している。事例M、Oは、死の先にある「素晴らしい」「きれい」な世界を感じ、死の恐れがなくなったとしている。

死の先の世界が具体的にイメージ化されたことによって、自分の死を含めた人間の死一般への理解が深まったとする臨死体験者もいる。

事例P：当時46歳、男性（暖かい色をした光が見えてそこに行きたくなくて）

それは、宗教観とか、信仰も含めてだけでも、死に対する恐怖がすごく薄らいだかな。だから、人が死んでいくってことは、もちろん自分の信仰している宗教観も含めてだけれど、いろんなことがすごく、そういうことに関する理解はすごく深まったかもしれない。

事例Pでは、臨死体験以前から自分の宗教観に基づいて抱いていた死の先のイメージが臨死体験によってよりはっきりと理解できるようになったとしている。そのことによって、宗教観も深まり、また同時に死に対する恐怖がかなりの程度薄らいだことが述べられている。

次に、自分の肉体を離れたという体験をした臨死体験者の事例について取り上げる。このようなケースでは、肉体を離れても自分は何らかの形で存続すると考えるようになった。

事例B：当時28歳、男性（倒れた時に自分の体から抜け出して）

死後の世界はあるんだなと思いましたね。

〈中略〉今ここを三次元とすれば、こういう言葉を使っていいかわかりませんが、四次元とかね、五次元とかね、平行宇

宙みたいなね、そういうところに、まあ、体から離れた存在っていうのは行くのかなと、そういうふうに思いましたね。

事例G：当時20歳、女性（気がつくとも離れたところから自分を見て）

（自分の体を指さして）これは上着だっという意識がすごく出てきた。〈中略〉「この着ている肉体は何？」という感じで。そうすると、結局纏っているものでしょ？結局そこから離脱するものって。〈中略〉そこから勉強をいろいろとやらしてもらっていると、輪廻転生、何生も人間はするっていうこともわかったり、なんだかんだということが、ずっと納得するわけ。一回体を離れているから。〈中略〉（死の恐れからの）第一払拭が二十歳の時の離脱なんじゃないかって。あれから、死をこわくなくしてもらったというか。「えっ、人間て死なないの？」って。

事例Bは、肉体を離れた存在は別の世界に行くことを推量する。事例Gは、肉体を纏った上着であると考えようになり、その後、輪廻転生の思想に共鳴するようになったとする。死の先にある世界へのイメージは、先の事例（E、H、L、M、O）のようには具体的ではないが、人間は肉体を離れても存続し、死の先の世界があることを確信していることが伺われる。Gの場合、肉体を離れても人間は存在し続けるかもしれないと感じさせたその体験は、死への恐れがなくなる最初のきっかけだったとしている。

死の瞬間についてイメージ化している事例も見られる。

事例J：当時30歳、女性（宇宙空間のような場所で浮遊して）

なんかね、死ぬ瞬間自体はとってもね、怖

くないんだなあ、と思ったの。〈中略〉もう横になって、痛いだのなんだのしているのをわかっているうちは辛いけれど、それが過ぎた時には、割と、ああー、すーっと、「なんか私死んじゃうんだろうなあ」っていう感じがあるんだろうなって思う、うん。

事例Jでは、臨死体験者は宇宙空間のようなところで浮遊し、その時の感覚を「意識がふわーふわーとした感じ」と述べている。それは気持ちがいとまでは感じなかったものの、苦痛や恐怖からは遠いものだったという。その体験から、死の瞬間というものを上記のようにイメージするようになり、死の瞬間の恐れがなくなったと語る。

さらに、生と死の全体像を垣間見るような体験事例についても見てみよう。

事例I：当時13歳、男性（別の世界に生まれ変わった体験をして）

小さく点のように見えた光に近づいて行って、その中に入った瞬間、別の惑星に生まれ変わったんです。〈中略〉その惑星で年老いて最後は老衰で死んだんです。〈中略〉その惑星での死は、喜びなんです。死ぬ時には、何もやり残したことが、後悔、恨みなんかがないんです。自分にとっても喜びだし、周りの人にとっても「よかったね」という感じなんです。〈中略〉臨死体験をした後に死が恐ろしくなくなりました。転生した惑星での暮らしを体験したからです。死は解放であり、幸せなんです。

事例Iは、「死は終わりではなく、卒業のような区切りである」ということを、臨死体験の中で転生した別の世界の観点から学んだとしている。その結果、この世界で自分の人生に訪れ

る死も恐ろしくなくなると語る。

この事例に類似するものとして、向こう側の世界から死がどのように映るのかを間接的に示されたとするケースもある。

事例C2：当時26歳、男性（周囲に自分を癒す様々な存在が来て⁸⁾）

（肺水腫で衰弱していた時に自分の周囲に）人間の形をした連中以外に、明らかにイルカじゃないかと思うのも来ていて、ここは陸なのになんでイルカが来るんだろうと思って。イルカはもう大笑いしているんですよ。なんていうのかな、僕が死ぬかもしれないってのははらしているのが、要するにおかしいんでしょね。本当に腹をかかえて笑っていて。で、まわりをぐるぐるまわっていて。でも、馬鹿にしている笑いじゃなくて、要するに子供がよく事情がわかなくて泣き出したのを親が、「そんなことも知らないのか」って言って笑うって、その感じなんです。〈中略〉そのなんていうかな、きっと笑えるくらい滑稽なんです。でもその中にいるとわからない、それが。そのくらい、仕組みされているルールというか。

事例C2では、向こう側の世界から見れば、死に直面してあわてふためくことが滑稽に映っており、死が究極の終わりではないことを感じ取る。その体験を通して、死への恐怖は、この世界の仕組みられたルールであると考えようになったという。

事例IやC2は、別の世界の観点から死について示されるような体験をしたことによって、生と死を俯瞰するような視点を持つに至っている。その結果、死は究極の終わりではないと確信し、死への恐怖がなくなったとしている。

以上のように、臨死体験者たちは、体験した出来事に依拠しながら、死の瞬間や死の先にあるものをイメージ化したり、さらに生と死を俯瞰する視点を確立したりするが、その中で、「死の先に続く世界がある」、「肉体とは別に何らかの形で存続する」、「死の瞬間は苦しみが無い」、「向こう側の世界から見ると死は究極の終わりではない」などといったことが確信されている。そうした確信と連動して、死への恐怖がなくなったり、やわらいだりするということが語られているのである。

3-4. 臨死体験は死へのどのような恐怖を減じているのか

臨死体験者には、死の恐怖がなくなったり、やわらぐことが見られた。ところで、「死の恐怖」とは何なのか、臨死体験によって「死の恐怖」のどのような側面が減じられるのか、ここで一度確認しておく必要があるだろう。

まず、一人称の死である「私の死」に人はどのような態度を持ち合わせているのであろうか。たとえばハイデガーは、死は未来に確実に到来するものと意識されることによって、私たちの時間意識を規定しているとし、私自身の死は「追い越すことができない」という特徴があると述べる [Heidegger [1927]1935=1961]。中島は「追い越すことのできない」という独特の様相を帯びる私自身の死は、「私の死」に関する異なる二重のアスペクトをもたらすと指摘する。すなわち、(1) 私の死に対するいま現在の態度、(2) 私が死んでしまったあとの状態、である [中島 2007]。一見、(2) の私が死んでしまったあとの状態こそが「私の死」の本来の意味であるように思われるが、(1) の「私の死に対するいま現在の態度」が、(2) と常に絡み合って存在する。この考え方に沿えば、「死の恐怖」とは、現在の私によって、「私の死」が到来した時のことを予想することによっても

たらされる。

では、現在の私によって、予想される死の恐怖とは何だろうか。代表的なものは、死に至る人間の肉体的苦痛と、生命が断ち切られて消滅するという死そのものに対する恐怖の2つがある [岸本 (英) [1964] 1973]。後者の死そのものに対する恐怖は、肉体の死滅自体への生理的恐怖と自分という存在の意識が消滅してしまうことに対する哲学的な恐怖が指摘される [古東 2008]。自己の消滅の恐怖には、世界から自分だけが切り離されていく孤独への恐怖 [芹沢 2008] も含まれるだろう。

さらに、「私の死」の特殊性によってもたらされる恐怖がある。つまり、現在の私がどのようにそれを予想しようと、「私の死」は「追い越しえない」。ジャンケレビッチは一人称の死を経験不可能な主観的領域と位置づけたが [Jankélévich 1966=1978]、「私の死」は予測不可能な未知のものであること自体が恐怖をもたらす。「肉体的苦痛への恐怖」や「死による消滅への恐怖」は、つまるところ他者の死を見聞きした類推や予想である。実際に自分にはどう体験されるかは知ることができない。その点から考えると、「予測不可能で未知である恐怖」はこの2つの恐怖よりも上位にある恐怖である。

さて、臨死体験者の語りの中では、死の瞬間が苦痛でないのを感じたこと、また、死は消滅ではなく死の先に続く世界があることを確信することが見出された。こうした確信によって、肉体的苦痛への恐怖や、死による消滅への恐怖は、存在しなくなっている。さらに、死の瞬間や死の先にある世界について具体的なイメージや生と死を俯瞰する視点が獲得され、臨死体験者にとってもはや死は未知のものではなくなっている。つまり、臨死体験は、肉体的消滅の恐怖、死という消滅への恐怖、死が未知である恐怖など、代表的な死の恐怖をそれぞれ緩和している。

とりわけ、「私の死」が経験不可能で未知であるという恐怖が減じることは、臨死体験による死生観の変容の特異性を物語っており、注目される。

3-5. ガンからの回復者と臨死体験者の比較

臨死体験者にとって死は未知のものでなくなっている。それでは臨死体験を伴わない生命の危機からの回復体験ではどうなのだろうか。

生命の危機において死に直面する体験といってもさまざまであるが、ここではガンの闘病体験を持ち、なおかつ一定の回復をみた人たちに焦点を当てることにした。

近年、ガンは死亡原因の第1位となっており、年間の死亡者数全体の約3割がガンによるものである〔厚生労働省 2013〕。ただ、ガンに対する治療の進歩もあって、ガン患者の5年相対生存率は年々増加傾向にある〔公益財団法人がん研究振興財団 2012〕。しかし、一方で、ガンにかかること＝死というイメージが根強くある。ガンの闘病記では、ガンに罹ったことを知った当事者は、「“死”は確実に身近なものとなった」〔小川 2008〕、「私の人生はこれで大きく組み立て直さなければならなくなった」〔岸本(葉) [2003] 2006〕、「涙を流すに任せて「なんで自分が。自分が」と心の中で叫ぶ」〔野口 2001〕という反応を見せる。ずっと変わらず続いていくように見えた人生が終わりを迎えるかもしれないということ突きつけられ、ガン患者は「死」に直面する。

ただし、ガン患者の死への直面は、臨死体験者の死への直面に比べて迂遠である。臨死体験者の場合は病気や事故などでその時点で危機状態に晒され、突発的に日常からの意識が後退していく。ガン患者は「ガン」という病名を知って将来の死の危険性を予測するが、その瞬間に命を奪われる状況にいるわけではない。死の直面体験のあり方は異なっているからこそ、両者

を比較することで臨死体験による死生観の変容がどのようなものなのかがはっきりと浮かび上がってくることを意図した。

それでは、ガンからの回復者の死生観について具体的に見ていくことにしよう。ガンからの回復者の死生観については、急性期のガンの治療を終了して社会生活に復帰した、20～60代の男女両方を含む回復者⁹⁾である11名の手記をもとに考察した(表3参照)。

ガンはたとえその患部が手術やその他の療法で取り除かれたとしても、再発や転移の可能性が残されている。回復後も死と直面しなければならないという特有の状況がある。こうした状況に対して、「私はガンによる死の恐怖と向き合っていかなければならない。このことだけは、私はどうしても、納得できない」(表中手記①)と置かれた状況の理不尽さをストレートに嘆く20代女性の回復者から、「がんがん生きる歯止め」であると、ゆるやかな生き方にシフトするための自己改革の機会(手記②)と考える60代男性の回復者まで、その受け止め方の幅は大きい。一度の再発もなく30年余りを経た60代の女性の回復者は、ガンはいのちに限りがあるという当たり前のことを、若いうちに心と身体に深く実感させてくれたとし、「そのおかげでしょうか、〈中略〉日々、身のまわりに、この星が育む美しいもの、楽しいことを発見し、感謝に満ちて暮らせるようになりました」(手記③)という境地を語る。

こうした幅はみられるものの、回復から5年目前後までに書かれた手記の中で最も顕著なのは、絶えず死を意識しながら、限りある生をどう生きるかを模索する態度である。

ガンがいつか再発するかもしれないという不安や死がつきまとう日常を回復者たちはリアルに綴る。「再発の命刻みて 過ぎし日々、あと幾たびの 春はあるかと」(手記④)と短歌に詠う70代の主婦。予定調和的な楽観主義は完

表3 ガンからの回復者の手記に見る死生観についての記述

<p>手記① 〈女性 20代 会社員 悪性リンパ腫 幹細胞移植後3年半〉 だけど、多くの29歳は自分が健康だと気づくこともなく生活しているというのに、なぜ、私は、ガンになったの!? ガンになったこと、私はそれを許せない。友人や先生や家族は今も私を支えてくれて、音楽も心を癒してくれる。だけど、私はガンによる死の恐怖と向き合っていかなければならない。このことだけは、私はどうしても、納得できない。コンニャロー☆!! [多和田 2002]</p>
<p>手記② 〈男性 60代 大学教員 胃ガン 手術から3年目〉 わが「ガン晴れ日記」によると、(1) ユックリズムを大切に、(2) まず自分を楽しむ、(3) 人生六十点主義、(4) ムキにならない、(5) 可能性を信じていき、と。手術直後から幾度も考え直してきた。今こそ、自己改革が必要な時である。 癌治療 ガンガン生きる 歯止めにも [川 2004]</p>
<p>手記③ 〈女性 60代 文筆家 乳ガン 手術後30年〉 〈途中略〉この病いは、私の生き方に大きな影響を与えました。いのちに限りがあるという当たり前のことを、そして、今この瞬間に此処（ここ）に存在する自分を措（お）いて、他の何処（どこ）かに「私の人生」というものがあるわけではないという、これまた当然のことを、若いうちに心と身体に深く実感させてくれたのです。そのおかげでしょうか、〈中略〉日々、身のまわりに、この星が育む美しいもの、楽しいことを発見し、感謝に満ちて暮らせるようになりました。[中島 2003]</p>
<p>手記④ 〈女性 70代 主婦 膵臓ガン 手術後3年半〉 「生き方」について語る人は多いが、「死に方」について語る人は少ない。私も含めて「死」を意識したがん患者は、「死に方」の方が大切になってくる。〈中略〉自分の人生を幸せだったと言って閉じることができるように、いかに思い残すことなく日々を過ごせるか。[小川 2008] 再発の命刻みて 過ごし日々 あと幾たびの 春はあるかと [小川 前掲]</p>
<p>手記⑤ 〈女性 40代 会社員 乳ガン 手術後1年10ヵ月〉 様々な出来事に出会うが、私にとって小康を保っている今が、これまでで一番あらかではないかと思う。ある日の午後、川辺の並木道を歩いているとき、すべてが幸福につながるというような甘い帳尻あわせを認めないと言った、あの友人のことを再び思い出した。〈中略〉「苦痛や死に耐える準備をしながら、私なりの予定不調和を、今、生きている」[篠原 2008]</p>
<p>手記⑥ 〈男性 30代 ビデオ店店長 胃ガン 手術後6年〉 その後、数人の知り合いが命を落とし、私の祖父もガンで死んだ。相変わらず生活上のトラブルが激しく起こる。そしてまたしても食べすぎてダンピングだ。〈中略〉今はささやかなスピードでしか生きられない。が、それが価値だ。そこに手応えがある。溺れまい。この場所で呼吸する。〈中略〉人は死ぬ。そう書けるのは生きているうちだ。見知らぬ老婆がペダルをこいでいる。向かう先にはどんな大入道がいるのだろうか。[谷岡 2001]</p>
<p>手記⑦ 〈男性 30代 医師 軟骨肉腫 手術後2年〉 その後の私は、「今できることは何でもする」の精神で生きている。アメリカの友人から、「あまりがんばり過ぎるな、身体を大切にしろ」と再三の忠告のメールが届く。しかし、何十倍も濃くなってしまっている私の空間では、前進するエネルギーは止められない。〈中略〉今の私は、人生をかなりの速度で飛ばしている。密度の濃い空間を全速力で駆け抜けている。[野口 2001]</p>
<p>手記⑧ 〈女性 40代 エッセイスト 虫垂ガン 手術から4年目〉 この先、生が限られるかもしれない心構えを持つと同時に、不安を内包しながら、いつ終わるとも知れない日常を坦々と生きる、堅忍不拔の精神を養うこと。がんになってまる四年を迎えようとする、私の目標である。[岸本（葉）2006]2008]</p>
<p>手記⑨ 〈女性 30代 看護師 乳ガン 手術後3年〉 〈途中略〉ある時から死ぬことを考えるのも悪くないと思うようになった。今は時々、死んだ後のことも考える。いったいどこに行くのだろうか……。そうだ、行きたい所を自分で決めればいいんだ。由美子がいる。お祖父（じい）ちゃんもいる、美智子叔母（おば）ちゃんもいる。そんなところだったら楽しいかもしれない。[山内 2008] これからは、やりたいことは何でも挑戦したい。〈中略〉ただ一度きりの人生。自分で選んで、濃く生きたい。命が消える瞬間まで、精一杯、生きよう。[山内 前掲]</p>
<p>手記⑩ 〈男性 40代 銀行員 大腸ガン 手術後1年〉 例えば元駐米大使の牛場信彦氏は、直腸がんが肝臓に転移して手術が無理な状態となっても、国際平和活動に尽力して世界を歩いておられた。〈中略〉まして私のような平凡な一介の銀行員にとっては、今できること、つまり今の自分に課せられた仕事を精一杯やることしかないのだと思えてきた。大切なことは、毎日の生き方なのであろう。〈中略〉人間はだれでもいつかは死ぬ。ただし死ぬまでは与えられた仕事を必死にやるしかない——。それが、私なりに得た結論であった。[関原 2003]</p>
<p>手記⑪ 〈男性 30代 新聞記者 辜丸ガン 手術後7年〉 僕はあとどれくらい生きるだろうか。〈中略〉がんはいつも、こうした問いをつきつけてくる。三度目の再発の兆候がない今でも、考えずにはいられない。しかし、自分の死について考えていると、自然に、そこまでどう生きるのか、どう生きたいのかという問いに流れていく。あげく、今、今日、十分に生きているだろうかという自問につながる。いろんな人やモノや出来事に、感謝の気持ちがあわく。[上野 2002]2007]</p>

※ガンからの回復者の年齢は手記執筆時のもの

全に崩れ去り、「苦痛や死に耐える準備をしながら、私なりの予定不調和を、今、生きている」(手記⑤)と表明する40代の女性。「人は死ぬ。そう書けるのは生きているうちだけだ」(手記⑥)と、死を包含した自らの日常の中のさまざまな不条理をリアルに見据えながら、逆説的に生きていることの手ごたえをあぶりだす30代の男性。

継続して「死」と向き合いながら、この先どう生きていくかについても必死に模索がなされる。来年という未来は保証されないと、「今できることは、何でもする」の精神で生き、「密度の濃い空間を全速力で駆け抜けている」(手記⑦)と、以前とは異なる凝縮された日常を生きるようになった30代の医師。「この先、生が限られるかもしれない心構えを持つと同時に、不安を内包しながら、いつ終わるとも知れない日常を坦々と生きる、堅忍不拔の精神を養うこと」(手記⑧)という生き方を見出す40代の女性エッセイスト。30代の看護師は、誰しもいつか死が訪れることを受容し、「今は時々、死んだ後のことも考える。いったいどこに行くのだろう……」と、死後のことを想像する一方で、「ただ一度きりの人生。自分で選んで、濃く生きたい。命が消える瞬間まで、精一杯、生きよう」(手記⑨)と、これからの人生を意欲的に生きていくことを誓う。40歳になる直前で一度目のガンを発症した銀行員は、手術を経て社会復帰を目前にして、「人間はだれでもいつかは死ぬ。ただし死ぬまでには与えられた仕事を必死にやるしかない——」(手記⑩)と、仕事を通して毎日を精一杯生きることに努めようとする。20代半ばでガンになり2回の再発の後に社会復帰した新聞記者は、「僕はあと、どのくらい生きるだろうか。〈中略〉がんはいつもこうした問いをつきつけてくる。〈中略〉自分の死について考えていると、自然に、そこまでどう生きるのか、どう生きたいのかという問いに、流れてい

く」(手記⑪)と、ガンという病がつきつけてくる問いに向き合うことで、自然とどう生きていくかを繰り返し考えたと述べる。

このように、回復者の手記の大半からは、「死」という実は誰にとっても避けられない人生の終わりを、ガンという病を通過したことによって、より現実的なものとして受けとめつつ、だからこそ限りある生命をかみしめ、どう生きていくのかということに絶えず意識を向けているというあり方が見えてくる。

多くのガンからの回復者は、常に死の到来を意識しながら日常生活を送るという態度が常態化していると言える。ガンからの回復者に特徴的な態度とは、ハイデガーの言う「先駆的覚悟性」に匹敵する。「先駆的覚悟性」とは、死という終わりを先取りして受け止めて、現在の一瞬一瞬が死という終末に向う途上にあることを自覚する態度である。ハイデガーは先駆的覚悟性によって本来の自己を取り戻して生きる道が開かれるとし、それは終末を漠然としか予期せず目の前のことに埋没するようなあり方と対照的なものであるとした [Heidegger [1927]1935=1963]。手記に描かれたガンからの回復者のあり方は、まさに先駆的覚悟性をもって臨む生き方である。

臨死体験者においても、生命の危機を伴う闘病体験の結果として、人生の有限性を認識して生きようになり、物事の選択が自覚的になったという事例も見られた。しかし、臨死体験の特色は日常意識の後退の中で生じた異世界体験であり、その死生観の変容の中核にあるのは、死の瞬間や死の先の領域を具体的にイメージすることや、生と死を俯瞰する視点を確立することにある。それに連動して死の恐怖が減じたということも語られる。そこには死の向こう側から自分の生を眺めるといった態度が見られる。

ガンからの回復者の手記には、有限の生をい

かに生きるかという自分自身への問いかけや、生の一瞬一瞬を慈しむという語りが見出される。しかし、死は相変わらず未知のものであり、死の恐れがなくなったということは語られていない。関心の中心は将来到来する死であり、それを起点として自分自身の生を考えていくことである。その視点はあくまでも死のこちら側としての生に向けられる。

両者を対比すると、時間を考える起点が異なる。ガンからの回復者は「死の到来」を起点としているのに対し、臨死体験者は「死の向こう側」が起点となっている。

つまり、ガンからの回復者が、「先駆的覚悟性」を以って死という終わりを見据えて生きることによる大局観を形成しているのに対し、臨死体験者は死の先までも及ぶ大局観を形成している。そうした大局観を可能にしているのは、ガンからの回復者に関しては死のこちら側を包括する時間意識であり、臨死体験者については死の向こう側を包含するような時間意識である。臨死体験による死生観の変容とは、言い換えれば「死の向こう側を包含する時間意識」を獲得することなのである。

3-6. 臨死体験の一人称の死生観が示唆するもの

臨死体験者の死生観の変容には、特有の時間意識の変化が見られた。では、一人称の死である「私の死」と時間意識とは通常どのような関係にあるのだろうか。

「私の死」は時間軸の中で「追い越すことのできない」という性質を持つことから、中島は次のように指摘する。すなわち、「私の死」は、「それが実現されてもそれを認識する現在という時を迎えることのない他者」であり、さらに「越境して無に「なる」瞬間に「無」¹⁰⁾ という名の無に転落し、あらゆる言葉を拒絶する」[中島 前掲]。この指摘から見えるのは、私たちが

「私の死」を捉えることができないというジレンマを抱えているということである。そこからは、1.「私の死」を「追い越すことができない」という時間の断絶、2.それが到来する時に認識できないという断絶、3.それについて語る言葉を持たないという断絶、という側面が絡み合った「私の死という断絶」が見えてくる。

「私の死という断絶」という点から見れば、臨死体験による死生観の変容にどのような意義があるだろうか。ここで、臨死体験の影響下での死生観に限らず、死生観一般について整理しておく。

さまざまな死生観の中には、何らかの形で生命の永続性を希求するような観点が表出する。宗教学者の岸本英夫は死生観を検討し、生命の永続性を希求する観点から「死生観四態」として、次のような4つの死生観の類型を指摘している [岸本（英）前掲]。すなわち、①肉体的生命の存続を希求するもの、②死後における生命の永存を信じるもの、③自己の生命を、それに代わる限りなき生命に託するもの、④現実の生活の中に永遠の生命を感得するもの。

①は、自分の生命がずっと継続していくことを望むような考え方である。神仙思想や道教などの不老不死への試みの中に典型的に見られる。また、死をわが身にふりかかる現実として考えることをどこまでも避け、「まだまだ」と死の覚悟なしに死の淵に飲み込まれる現代人の死生観もこれに類するとされる。②では霊魂は肉体の死後も肉体とは分離した態度で存在を続けるとするものである。神道の靈魂観、輪廻思想、ユダヤ教やキリスト教の天国・地獄思想、仏教の西方浄土など、さまざまな宗教の中にこうした考えが見出される。③は、自分の生命の直接的な永存を求めようとはせずに、自分の生命に代わり得る生命を見出すというもの。たとえば、芸術家が自分の作品の中に永遠性を昇華させる、母がわが子に自分の生命を託して献身

する、民族の繁栄の中に自分が永遠に生き続ける道を見出すなどということである。④は、生命を時間的に延長するのではなく、現在の刻一刻の生活の中に永遠の生命を感得して、肉体の上に永遠の生命を実現するというものである。そうした境地は、たとえば、芸術が作品の創作に没頭している時、禅家が悟得に至った時、宇宙の支配者である神を信じ、それと一体化する時などに訪れるとされる。

この4つの死生観の類型に基づくと、「私の死という断絶」をどう扱うか、またその時間意識の様相について、以下のように指摘できるのではないだろうか。すなわち、①の死生観は、ひたすら「私の死」の到来から逃れようとし、断絶を拒絶するあり方が見られる。また時間意識においては、私の死ははるか遠い将来にあるとしてこれまでの日常が無限に続くと思える。②では、永続する霊魂を想定することによって、「私の死」の断絶を解消する。その中で、死の向こう側から生を眺める時間意識が生じる。③では、自分の生きた証を他者や事物に継承させる。私の死の到来よりも後まで現存することが予想される事物から、生を見る時間意識が捉えられる。④では、現在に永遠を感得することによって、将来の「私の死」という断絶は問題でなくなる。私の死の到来を時間的な限定と見ることから外れ、現在の中に生起する小さな生と死のサイクル、もしくはその中に出現する永遠性に意識を集中させる。

臨死体験による死生観を分類すれば、類型の②に区分けされるだろう。ところで、近代までの日本人の伝統的な死生観としては、死後、個人は、共同体、もしくは宇宙や自然などに帰っていくといった死の向こう側の領域が想定されていた〔柳田 [1946]1990、加藤・ライシュ・リフトン 1977a、1977b、梅原 1989、立川 1998、他〕。つまり、②の「死後における生命の永存を信じる」死生観を長らく保持してい

た。そして、生者は死の向こう側の領域と遠く隔たってはならず、生と死の世界は環流しあうものと考えられていた。

ところが高度成長期以降、生は有であり、死は単なる消滅という考え方に特色づけられるような「唯物的な層の死生観」が主流になる〔広井 2003〕。そこでは、生の側にのみ価値を見出し、それをできるだけ長く存続させようとする、類型①の「肉体的な永存を希求する」死生観が強調されている。しかし、こうした死生観には、老いや死を受容する物語を形成する余地はほとんどなく、老いや死への対応が迫られる高齢化社会における問題点として浮上している〔広井前掲〕。

死の受容という点から考えると、次のような2つの局面を考えていく必要があるとされる。すなわち、竹内の言葉を借りれば、死のこちら側で、人生の終わりにおいて完結させるという意味での「死の物語」と、死あるいは死後のあちら側の世界、大きな枠組みとしての自然・宇宙とか、たましいのゆくえといった「死後の世界」を含む、大きな「死の物語」である¹¹⁾〔竹内 2008〕。

さしずめ、ガンからの回復者と臨死体験者の比較から得た知見に照らせば、ガンからの回復者が持つようになった「死のこちら側を包括する時間意識」と、臨死体験者が形成していた「死の向こう側を包含する時間意識」の両方が必要ということだろうか。

さらに臨死体験者の死生観に関して言えば、単に「死後の世界」を含む大きな物語を提示するだけにとどまらず、死の向こう側を包含する時間意識の獲得によって「私の死という断絶」を超克している点が注目される。

むろん、「私の死という断絶」の超克を提示するような死生観は臨死体験者のそれだけではない。死生観の類型③に示されたような「自己の生命を、それに代わる限りなき生命に託する」

あり方、また④の「現実の生活の中に永遠の生命を感得する」あり方などもそのヒントを与えてくれる。多様な死生観の中で「私の死という断絶」の超克が探求されるべきであるが、臨死体験による死生観の変容は、とりわけ死の向こう側を包含する拡大された時間意識という観点から、現代の死生観の問題にひとつの示唆を与えてくれる。

注

- 1) 臨死体験の原因論としては大きく分けると3つの仮説が立てられている。心理学的現象であるという「心理学的仮説」、脳の生理的な働きによる現象であるという「神経生理学的仮説」、肉体から分離した意識が死後の領域を実際に体験したとする「実体験仮説」である。心理学的仮説と神経生理学的仮説は、臨死体験を部分的には説明づけることは可能であるものの、臨死体験に出現する要素をすべて説明しきれていないとされる。また、実体験仮説については、間接的な証拠が多く出されているが、臨死体験を実体験であると説明づけるには有力な根拠が不十分であるとされている。このように臨死体験がなぜ生じるかということについての議論には決着がつかない状況にある [Greyson 2000]。
- 2) 訳文は執筆者による。
- 3) ただし、柿原が、臨死体験中に出現する“心の深いレベルでの意識の変容”状態の中で生じる全体性回復の補完現象を論じる [柿原 2006, 2008] といったように、理論面で少数ながらも見るべき研究は存在する。
- 4) 現在では、臨床的には死に近づいたと言えないようなケースも臨死体験に特徴的な体験内容が生じていることが明らかにされている。それに鑑みて、グレイソンはその定義で「典型的には死に近づいた人、もしくは生理的または情緒的に強い危機状態にある人に起こる」 [Greyson ibid] という表現を用いている。本論考における調査では、こうした定義にもとづいて対象者を選定した。それゆえ、調査対象者は臨床的な死に近づいたことを要件としていない。
- 5) 超常的感觉の出現は客観的に裏付けられたものではなく、本人の申告による。
- 6) 事例B、Fの超常的感觉の出現については、臨死体験から10年以上を経たからのものなので、臨死体験との関係は明らかではない。また事例Oについては、

臨死体験ではなくピプノセラピーが超常的感觉の出現のきっかけとして本人に語られており、超常感觉と臨死体験との関連はこの事例でも明確ではない。事例Nは、臨死体験以前からたびたび超常的体験があったが、臨死体験以後、そうした傾向がより顕著に表れるようになった。

- 7) 一方、死に対する考え方・感じ方に変化は見られなかったケースがあることにも触れておく。特に子供の時に臨死体験をしたケースでは、この点での変化は全く語られなかった (事例A、C1、D)。成人の事例では、少数であるが、「小さい時から死が怖かったが、臨死体験後も相変わらず死が怖い」というケース (事例K)、以前から輪廻転生があると確信していたので死への考え方は変化しなかったというケース (事例F)、幼いころから自分の体は借り物であると考えていたケース (事例N) があつた。
- 8) C2の臨死体験は観音様のような女性が招くかのように現れたというものだが、このエピソードは臨死体験後に連続して起きた出来事として語られている。
- 9) 一般にガンの治癒とは5年間の再発なしの生存が指標とされる。しかし、本論考では、体にガン細胞の働きが残っているかどうかという医学的な見地が回復者であるということの主眼にしない。そのため5年生存にこだわらず、一度生命の危機に直面して急性期を脱し、社会生活に復帰したことを回復者とした。
- 10) ここでは、「無」が、何かがない「不在」の意味ではなく、不可知ゆえに何も当てはめることのできないという意味で用いられている。
- 11) 竹内はシンポジウム「死の臨床と死生観」における柳田邦夫と広井良典の発言を参照しながらこのように指摘している [東京大学人文社会系研究科グローバルCEO研究室編 2005]。

引用・参考文献

- Atwater, P. M. H. (1994). *Beyond the Light: The mysteries and revelation of near-death experience*. New York: Avon. (アトウォーター, P. M. H. 角川春樹 (訳) (1995).『光の彼方へ』 角川春樹事務所 ((1997). ハルキ文庫))
- 岩崎美香 (2011). 「旅としての臨死体験—日本人の臨死体験の調査事例より」 情報コミュニケーション研究、2、35-52.
- 上野創 (2002). 『がんと向き合って』 朝日新聞社 ((2007). 朝日文庫)

- 梅原猛 (1989).『日本人の「あの世」観』中央公論新社
- Owen, J. E., Cook, E. W., & Steavenson, I. (1990). *Feature of "near-death experience" in relation to whether or not patients were near death.* Lancet, 336, 1175-1177.
- 小川嘉子 (2008).『負けない!泣かない!—膀胱がん闘病記』文芸社
- Osis, K., & Haraldsson, E. (1977). *At the Hour of Death.* New York: Avon. (オシス, K. & ハラルドソン, E. 笠原敏雄 (訳) (1991).『人は死ぬ時何を見るのか』日本教文社)
- 柿原有一 (2006).「臨死体験における自己実現と意識状態—パラドックス肯定のために」トランスパーソナル学研究、8、73-90.
- 柿原有一 (2008).「臨死体験からの帰還—「パラドキシカルな統合」の完成—」トランスパーソナル学研究、10、29-43.
- 加藤周一・ライシュ, M.・リフトン, R. J. (著) 矢島碧 (訳) (1977a).『日本人の死生観 上』(岩波文庫) 岩波書店
- 加藤周一・ライシュ, M.・リフトン, R. J. (著) 矢島翠 (訳) (1977b).『日本人の死生観 下』(岩波文庫) 岩波書店
- 川 一 (2004).『癌は、神様からのプレゼントだった』(新風舎文庫) 新風舎
- Candena, E., Lynn, S. J., & Krippner, S. (2000). *Introduction: Anomalous experience in perspective.* Candena, E., Lynn, S. J., & Krippner, S.C. (Ed). *Varieties of anomalous experience: Examining the scientific evidence.* Washington, D.C.: Amer Psychological Assn, 3-21.
- 岸本英夫 (1964).『死を見つめる心—ガンとたたかった十年間』講談社 ((1973) 講談社文庫)
- 岸本葉子 (2003).『がんから始まる』文藝春秋 (2006、文春文庫)
- 岸本葉子 (2006).『四十でがんになってから』文藝春秋 (2008、文春文庫)
- Kübler-Ross, E. (1997). *The wheel of life.* New York: Willam Morris Agency, Inc. (キューブラー・ロス, E. 上野圭一 (訳) (1998).『人生は廻る輪のように』角川書店 ((2003) 角川文庫))
- Greyson, B. (2000). *Near-Death Experience.* Candena, E., Lynn, S. J., & Krippner, S. C. (Ed). *Varieties of anomalous experience: Examining the scientific evidence.* Washington, D.C.: Amer Psychological Assn, 315-352.
- 公益財団法人がん研究振興財団 (2012).『がんの統計 2012年度版』(PDF版)
- 古東哲明 (2008).「死と他界」熊野純彦・下田正弘編 『死生学〔2〕死と他界が照らす生』東京大学出版会、47-66.
- Sabom, B. M. (1982). *Recollections of Death: A medical investigation.* Harpercollins. (セイボム, M. B. 笠原敏雄 (訳) (2005).『「あの世」からの帰還—臨死体験の医学的研究—』日本教文社)
- Sutherland, C. (1992). *Reborn in the right: Life after near-death experience.* Australia: Hickson Associates Pty Limited. (サザーランド, C. 片岡すみ子・他 (訳) (1999).『光の中に再び生まれて—臨死体験に学ぶ人生の意味—』人文書院)
- 篠原敦子 (2008).『その夏、乳房を切る—めぐり逢った死生観』星雲社
- James, W. (1920). *The varieties of religious experience: A study in human nature.* Longmans, Green, and Co. (Original work published(1901-1902).) (ジェイムズ, W. 増田啓三郎 (訳) (1969)/ (1970).『宗教的体験の諸相』上/下巻 (岩波文庫) 岩波書店)
- Jankélévitch, V. (1966). *La Mort.* Paris: Flammarion, Editeur. (ジャンケレヴィッチ, V. 仲沢紀雄 (訳) (1978).『死』みすず書房)
- 関原健夫 (2003).『がん六回人生全快—現役バンカー16年の闘病記』(朝日文庫) 朝日新聞社
- 芹沢俊介 (2008).「なぜ人は死に怯えるのだろうか」 島菌進・竹内整一編『死生学〔1〕死生学とは何か』東京大学出版会、161-185.
- 竹内整一 (2008).「死の臨床と死生観」島菌進・竹内整一編『死生学〔1〕死生学とは何か』東京大学出版会、235-257.
- 立川昭二 (1998).『日本人の死生観』筑摩書房
- 立花隆 (1994).『臨死体験』文藝春秋 ((2000a)/(2000b).『臨死体験』上/下巻 文春文庫)
- 谷岡雅樹 (2001).『三文ガン患者』太田出版
- 多和田奈津子 (2002).『へこんでも—25歳ナツコの明るいガン闘病記—』新潮社
- 東京大学大学院人文社会系研究科グローバルCOE研究室編 (2005).『シンポジウム報告集「死の臨床と死生観』』(PDF版)
- Noyes, R. (1982). *The human experience of death or, what can we learn from near-death experiences?* Omega, 13, 251-259. (ノイエス, R. (1991).「人間の死体験—臨死体験から何を学ぶか」グレイソン, B. & フリン, C. P.(編) 笠原敏雄 (監訳)『臨死体験—死と生の境界で人はなにを見るのか—』春秋社、316-329.)
- 中島みち (2003).『がんと闘う・がんから学ぶ・がんと生きる』(文春文庫) 文藝春秋
- 中島義道 (2007).『哲学塾—「死」を哲学する』岩波書店
- 野口幸洋 (2001).『地に落ちよ一粒の麦—若き大学医師

- のガン闘病記』扶桑社
- Heidegger, M. (1935). *Sein und Zeit*. Halle a.d. S.: Max Niemeyer. (original work published (1927).) (ハイデガー, M. 桑木務(訳) (1960)/(1961)/(1963).『存在と時間』上/中/下巻 (岩波文庫) 岩波書店)
- 広井良典 (2003).『生命の政治学』岩波書店
- Flynn, C.P. (1982). *Meanings and implications of NDEr transformation: Some preliminary findings and implications*. *Anabiosis: The Journal of Near-Death Studies*, 2, 3-13. (フリン, C. P. (1991).『臨死体験者の意味の変容』グレイソン, B. & フリン, C. P.(編) 笠原敏雄(監訳)『臨死体験—死と生の境界で人はなにを見るのか—』春秋社, 330-346.)
- ベッカー, カール (1992).『死の体験—臨死現象の探求』法蔵館
- 松谷みよ子 (1986).『現代民話考 [5] 死の知らせ・あの世へ行った話』立風書房 (2003, ちくま文庫)
- Moody, R. A. (1975). *Life after life: the investigation of a phenomenon—survival of bodily death*. Mockingbird Book. (ムーディ, R. A. 中山善之(訳) (1989).『かいまみた死後の世界』評論社)
- 柳田國男 1946 『先祖の話』筑摩書房 (1990).『柳田國男全集13』ちくま文庫)
- 山内梨香 (2008).『がけっぶちナースーがんとともに生きる』飛鳥新社
- 山村尚子 (1998).「臨死体験—終末医療における意義の検討—」日本老年医学会雑誌, 35 (2)、103-115.
- Ring, K. (1980). *Life at death : A scientific investigation of the near-death experience*. Coward, McCann & Geoghegan. (リング, K. 中村定(訳) (1981).『いまわのきわに見る死の世界』講談社)
- Ring, K. (1984). *Heading Toward Omega: In Search of the Near-Death Experience*. New York: William Morrow and Company, Inc.

参照ウェブサイト

- 厚生労働省 (2013).「平成24年 (2012) 人口動態統計の年間推計」2013年1月1日発表 厚生労働省HP <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/suikei12/> (アクセス 2013年4月9日)

要約

臨死体験は、典型的には死に近づいた人や何らかの強い危機状態にある人に起こる、超越的で神秘的な要素を帯びた体験である。本論考では、半構造化されたインタビュー調査から得られた17例の日本人の臨死体験事例に関して、臨死体験による死生観の変容の特色を明確にするために、臨死体験者と、臨死体験を伴わ

ない生命の危機状態から回復したガンの患者との比較を試みた。ガンからの回復者には、死という終わりを見据えて生きる態度が見られ、死のこちら側を包括する時間意識が形成されていたのに対し、臨死体験者は死の先の領域を意識し、死の向こう側を包含する時間意識を獲得していることがわかった。結論として、臨死体験は個人の死生観の拡大を促していることが導かれた。

abstract

A near-death experience is a transcendental and mystical phenomenon that an individual experiences in the hour of close to death or in critical condition. This article concerns seventeen cases of near-death experience in Japan. Data used for analysis derived from semi-structured interviews. To examine how individuals' view of life and death change after having such experience, the author compares two groups of individuals: those who had a near-death experience and those who were critically ill due to cancer and returned to life without having a near-death experience. Analysis reveals a significant difference between these groups regarding time consciousness. Individuals in the first group are conscious of a time after death, while those in the latter group emphasize a life time before death. Thus this difference leads us to conclude that a near-death experience can extend an individual's view of life and death.

Key words: near-death experience, views of life and death, realms of after life, time consciousness

謝辞

臨死体験の調査では、お忙しい中インタビューに応じていただいた臨死体験者の方々、そして臨死体験をした方を紹介して下さった方々の双方に深く感謝いたします。

論文をご指導いただいた、蛭川立先生、石川幹人先生、渡辺恒夫先生をはじめとする諸先生方に厚く御礼申し上げます。